

<寄稿論文>

持続可能な教師の成長

横溝 紳一郎
西南学院大学

要旨

教師の育成方法として、「教師トレーニング (teacher training)」の後に出てきた「教師の成長 (teacher development)」パラダイムでは、自らの専門的力量的の向上に向けて、ずっと学び続けていくことが教師に求められています。しかしながら、教師の成長のし方は多様ですので、エネルギー全開で自己の成長にチャレンジし続けることが困難になる場合も出てきます。本稿は、成長することにちょっと疲れた時にできることを提案します。

1. はじめに

拙著『日本語教師のためのアクション・リサーチ』を上梓した 2000 年頃から、私は「教師は成長し続けなければならない」と主張しているのですが、『日本語教師の成長と自己研修—新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして』の共同編集作業をしていた時 (2006 年) に、春原憲一郎氏から以下のような問いかけがありました。

紳さんって、成長神話の信者みたい。「博多祇園山笠は伝統を継承していかなくてはいけない」と強調するのに、どうして「教師は変わらないといけない!」と考えるのかなあ...

この問いに対して、私は「確かに...。う〜ん、どうして自分はそう考えるんだろう...。」と回答に困ってしまいました。『成長し続けることが教師にとって重要である』と私が考えることには全く問題はなさそうだが、それを他の先生方に強くアピールまたは強要してもいいのだろうか...。」と悩んでしまったのです。その頃の悩みが、以下の文言に表れています。

アクション・リサーチの実施者が実施中に「楽しくて仕方がない!」と思うこと

はまれのようなものである。アクション・リサーチに必要な不可欠な内省作業への従事によって、自分の教育活動を直視することが求められ、自分の弱点などの受容しづらい事実が見えてくるのが、その理由であり、その辛さは時には、実施者の「自信喪失」「自己否定」「自己崩壊」につながる可能性すらある（横溝 2009a）。

この悩みを解消するための解答を探す中で、「成長し続けないとさまざまな変化に対応できなくなる（横溝 2009b: 12）」と考えてみたり、「人を育てる仕事をしているのだから、教師は自分自身が育っている『背中』を手本として見せる必要がある」や「常に向上したいと思う姿勢が重要」と主張する文言を引用したりしてきました。

人を育てるために必要なのは、やはり自分が高まりつづけることだと思います。高まったからこそ見えることもたくさんありますし、そもそも、人に努力を促しておきながら自分が努力を怠っては、言葉に重みが出てきません。だから、自分が努力しつづけ、工夫しつづけ、チャレンジしつづけることが、絶対に必要だと思います。（横溝・大津・柳瀬・田尻 2010: 264）

授業がうまくなりたい、どうすればもっとよくなるだろうと悩んでいる先生たちに、万能の特効薬はありません。一人ひとり年齢も性格も環境も、学習者の状況も違いますから。でも、上手になりたい！工夫したい！と 365 日 24 時間ずっと思っていれば、目にする光景は脳にまで届き、重大なヒントを与えてくれます。それをしっかりつかまえて、改善策を練りましょう。常に向上したいと願い続けること。その先生ならではの知的興奮に満ちた授業は、ここから始まるのです。（田尻 2012: 26）

その後、日本語教員養成課程の学生や現場の先生方の成長の支援を、教師教育者として続けてきたのですが、「教師は成長し続けなければならない」という強い思いは現在も変わっていません、特に自分自身については。しかしながら、他の先生方への私のメッセージが、「成長し続けることは教師にとって重要です、たとえその成長が少しずつであっても。」と少しずつソフトになってきたような気がしています。（年齢を重ねてきたからかもしれませんが。）「成長しなきゃ！」と肩に力を入れて頑張るこ

とが大切なのは間違いない。でも、時には肩の力を抜くことも必要ではないか。それこそが「持続可能な教師の成長 (Sustainable Teacher Development)」につながるのではないか、と考えているのです。本稿は、「成長することにちょっと疲れた時」すなわち「自己成長のために肩に力を入れて頑張ることが辛くなってきた時」にできることを提案するものです。

2. 成長することにちょっと疲れた時の方策

以下の方策を提案します。

- ・ 疲れを取る
- ・ 色々な人と交流する
- ・ 小さな授業改善に取り組む
- ・ 意識することから始める
- ・ 名言によって教師の役割を再確認する

以下、一つ一つの方策について、詳しく紹介していきます。

2.1 疲れを取る方策

当たり前のようですが、「疲れた時は休む」のが一番です。このことは心身ともに当てはまります。無理をせずに「ちょっと休む」だけで、肩に入っていた力がずいぶん抜けていくものです。私自身は、子どもの頃から休むのが大好きなので、現在でも毎日 7~8 時間の睡眠時間を確保しています。

また、気分転換を図ることで、フレッシュな気持ちになれます。リフレッシュのために何を行うかは、個人差があります。美味しいものを飲んだり食べたりしてもいいでしょうし、お風呂に入ったりシャワーを浴びたりするのもいいでしょう。気の置けない友人との語り合いもいいですね。私自身はスポーツ好きなので、毎朝 30 分程度のジョギングを日課としています。

2.2 色々な人と交流する方策

交流する相手としてまず挙げたいのが、「同じ教育機関で働いている人」です。同

じ教育機関で働いていても、日々の忙しさ等が原因で、これまで交流できていない人が意外と多いのではないのでしょうか。そういった相手に話しかけることから始めてみてはいかがでしょうか。さらに広げて「異なる教育機関で働いている人」と交流すると、教えている環境（学校・学習者・カリキュラム・教科書・同僚等）が異なっていますので、大きな気づきがたくさん生まれます。現在はインターネットを使って、世界中の人々と交流できる時代です。活用しない手はありません。

交流する範囲を「日本語教育分野以外の人」にさらに広げると、気づきはさらに拡大・深化します。私の場合は、英語教育分野の先生方から教えていただいたことが、教育・研究の両面で大きく役立っています（吉田・玉井・横溝・今井・柳瀬 2009、横溝・大津・柳瀬・田尻 2010、横溝 2011a 等）。さらに、教育分野以外の方まで交流の範囲を広げると、「自分とは違う価値観を持っている人」に出会うことが可能になります。その機会を私にたくさん提供してくれるのが、博多祇園山笠です。20年ほど前に、博多祇園山笠についてインタビューを受けた時、以下のように答えたことがあります。

Q：山笠に参加することで、何か授業に役立っていることはありますか。

A：日本語の授業に「直接」という形ではありませんが、私にとっていちばん役に立っていることは、「先生」ではない自分の扱いを受けることができることです。一般的に教師は、教える立場に立って、普段「先生、先生」と呼ばれていると、いつの間にか自分が偉くなったような気になってしまうところがあります。でも、この祭りの期間中は、いわゆる社会的ステータスは、まったく関係ありません。祭りに対する経験の長さと貢献度だけで、その人の位置が決まります。そして、厳然とした「タテ社会」が存在しています。今年のテレビ番組で紹介されていたのですが、アメリカの特別領事をなさっていて、7月の沖縄サミットでも、財務長官や外務大臣を迎えたような「偉い」外国の方でも、山笠期間中はいちばん下の仕事の「皿洗い」担当でした。また、私は去年から「赤手拭い」という役員になったのですが、先に役員になったほかの町の先輩方に正座してお酌をして回っています。たとえそれが自分が普段、教えている学生と同じような年齢の方であっても、です。私にとって祭りの間は、非日常的なことの連続です。でもそれがあるから、自分を見つめ直すことができます。

るのではないかと考えています。

Q：横溝さんにとって「山笠」とは？

A：日本語教育の対象は、社会的・文化的背景が自分のそれとは大きく異なる外国人です。日本語教師には、外国人のものの見方・価値観を、そのままの形で受け入れることが必要とされる、と私は考えています。学校や会社など、自分と同じ職場や生活環境の人ばかりに囲まれて生活していると、自分の価値観が当たり前でユニバーサルなもので、「それが絶対に正しいんだ」と無意識のうちに思ってしまうのではないのでしょうか。祭りに参加すると、いろいろな職業の方々とも接することができます。異質な人々・出来事との出会いは、自分の価値観を見つめ直す機会を与えてくれます。私にとって山笠は、そういう意味でも、何事にも替えがたい大切なものだと思います。

色々な人と交流する方策として、最後につよくおススメしたいのが「成長し続けている人との交流」です。読者のみなさんの周りにもきっと、そういう人がいらっしゃるはず。何の分野でも「自分よりも、ずっと上のレベルで活動している人と一緒にいると、いつの間にか自分も向上している」ことはよくあると思います。このことに関して、伊東・松本（2005: 22）は、以下のように述べています。

コミュニケーションは一人では上手にならないのである。上手になる究極的なコツは、「コミュニケーション上手だなと思う人と、できるだけ多くの時間をともに過ごすこと」である。

全くその通りだと思います。私が在住している博多地区には、コミュニケーション能力が極めて高いオイシャン（博多の方言でオジサンのこと）がたくさんいらっしゃいます。そういう方々と、もうかれこれ15年以上いっしょにボランティア活動をしてきたのですが、私のコミュニケーション能力もいつの間にか、少しずつではありますが向上してきたように感じています。同じことが、成長し続けている人との交流にも言えると思います。

成長し続けている人と、できるだけ多くの時間をともに過ごすことで、自分も成長し続けることができる！

2.3 小さな授業改善に取り組む方策

「少しでもいいから、何かやってみる」という姿勢で臨めば、教師としての成長にチャレンジするハードルを、確実に低くすることができます。畑中豊氏は、以下のよう「何でもいいから、やってみよう！」と呼びかけています。

人と出会い、本と出会い、多くを学び、「今のままではいけない」と思ったら、明日からすぐ変えましょう。変わりましょう。理念、信念、プライド、体裁、照れ...、変わることを妨げるものは数多くあります。「何が不易で、何が流行か」を見極め、「何をスクラップし、何をビルドするか」悩み苦しむ日々。それが私たちの仕事です。「やってみる価値がありそうだ」「面白そうだ」「生徒が気に入ってくれそうだ」「いい方向に向かうかもしれない」などと少しでも思えたら、始めませんか。生徒の名前に「～さん」をつけて呼ぶ、自ら率先して言語環境を良くする、教室に入る前に口角を上げる、ドレスコードを見直す、背筋を伸ばして歩くなど、考え方ひとつですぐできることや、月〇冊の本を読む、月〇円貯金する、フィットネスクラブに通う、タバコをやめる、など多少の決意が必要なものもあるでしょう。宿題について考え直す、学習障害や発達障害について学び直し、生徒への向き合い方を変える、授業スタイルを変える、など少なからず努力の要るものもあります。勇気をもって豹変すれば、仕事に対する見方、考え方がポジティブになり、やり甲斐を感じるようになるでしょう。さあ！明日からと言わず今日から！！（瀧沢・大塚・胡子・畑中 2020: 133）

「何かをやってみる」の「何か」が見つからず悩む時は、「アクティブ・ラーニングを実現するための視点（横溝・山田 2019: 50-52）」を活用することが可能です。

視点1：学習者の学びが成立するように心がけているか

- a. どうしたら、学習者は学びやすいか
- b. どういうことばを使ったら、学習者は分かりやすいか

- c. どういう質問をしたら、学習者は考えやすいか
- d. どういうふうに接したら、学習者は受け入れてくれるか

視点2：学習者の多様性に対応しているか

- a. やる気
- b. 年齢
- c. 学び方（学習スタイル／学習ストラテジー）
- d. 学習不安
- e. 母語能力
- f. 現在の日本語能力（レベル差）
- g. 学習習慣
- h. 学習動機／目的

視点3：適切な学習環境を提供できているか

- a. 安心して学べる
- b. 楽しく学べる
- c. 協力して学べる
- d. お互いに讃え合い、祝い合い、ほめ合う

視点4：学習者が主体的／積極的に学ぶ機会を提供できているか

- a. 授業中に学ぶ（動いたり、考えたり、体験したり）
- b. 授業外で学ぶ（宿題など）

視点5：学習者にとって意味のある内容や中身になっているか

- a. 内容・中身が面白い
- b. 内容・中身が深い
- c. 文脈化がなされている（誰が・誰に向かって・何のために表現するかを明確にした上で、表現活動を行っている）
- d. 個人化がなされている（自分について話したり書いたりしている）
- e. レベルが適切である（日本語レベル、知的レベル等）

- f. 自己表現が、相手理解・相互理解につながっている

視点6：学習者に自己選択・自己決定の機会を与えているか

- a. 学習者に、教材のレベルの自己選択・自己決定の機会が与えられている
- b. 学習者に、制限時間の自己選択・自己決定の機会が与えられている

視点7：時間枠を設けて活動をさせているか

- a. 機械的ドリル等の比較的単調な活動を行う際、長くやりすぎない
- b. 沈黙考型の活動を行う際、十分な時間を確保し、その時間があらかじめ伝えられている
- c. 話し合い活動を行う際、十分な時間を確保し、その時間があらかじめ伝えられている
- d. 身につくまでの十分な練習時間が確保されている

視点8：振り返りやフィードバックの時間を設けているか

- a. 各学習者による振り返り
- b. 学習者間の振り返りの共有
- c. 教師からのフィードバック

視点9：「見通し」を与えているか

- a. 達成目標（「評価規準」「CAN-DO」「ルーブリック」）が、学習者に伝えられているか
- b. 「その活動によってどんな力がつくのか」が、学習者に伝えられているか

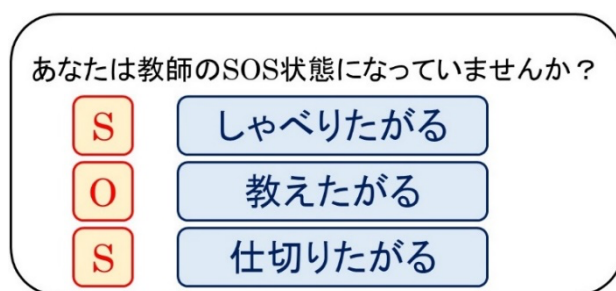
これらの視点の中から「やってみるもの」を選び、自分の教育現場に合わせた形で実践してみると、教師としての成長をスイッチ・オンにすることが可能になります。

「アクティブ・ラーニングを実現するための視点」を心に留めて授業改善を試みようとすると、非常に多数の、ある意味無限の改善点が見つかります。まさに、「アクティブ・ラーニングの視点は、どう授業改善を行えばよいのかに関する、様々なヒントを与えてくれるもの」なのです。

2.4 意識することから始める方策

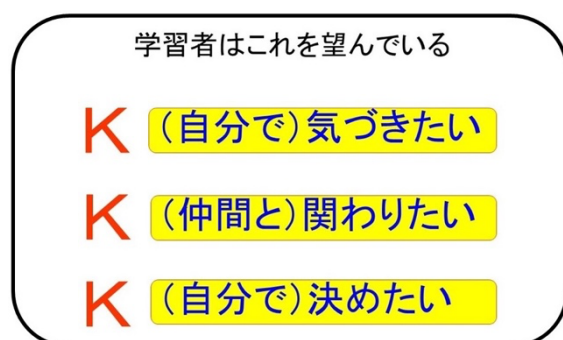
「教師の SOS」すなわち「しゃべりたがる」「教えたがる」「仕切りたがる」は、「こうあってはいけませんよ」という戒めです。「こうあってはいけない」状態を、自分への戒めとして心にとどめおくことは、教師としての成長につながります。そこで、私は「教師の SOS」を印刷して研究室に貼り、いつも目にすることができるようにしています。

図1 教師の SOS



教室内外で、自分がしゃべり／教え／しきりすぎてないか考えてみると、授業の改善点が見えてきます。さらに、授業のデザイン・運営方法について考える時には、中嶋洋一氏が挙げた「学習者の 3K（中嶋・坂上・高橋・中山・宮崎 2021:13）」を心に留めておくのが効果的です。

図2 学習者の 3K



学習者が（自分で）気づきたい・（仲間と）関わりたい・（自分で）決めたい、という気持ちを持っていることを意識すると、授業の改善点が見えてきます。例えば、「①自分（たち）で何をどのように学ぶかを自己選択：自己決定させ、②協働作業を組み

入れ、③発問を投げかけたりふり返りの時間を与えたりすることで、学習者が自分で気づくように導く」という流れで授業を構成することにより、学習者の授業への積極的参画を実現することができます。

3. 名言によって教師の役割を再確認する方策

「アクティブ・ラーニングを実現するための9つの視点」も「教師のSOS」も「学習者の3K」も、「教師としてできること／すべきこと／やってはいけないこと」をリストアップしたものです。教師としての役割を再確認するには、いわゆる「名言」も役立つと思います。以下、私が座右の銘にしている名言を挙げてみます。

「困った人は困っている人なんだ。」(中谷 2005: 3)

学習者の言動を受容できずにカチンと来そうな時に、この発想の転換ができれば、「望ましくない言動をしている困った学習者」は、「そういう言動をするようになってしまっている、困っている学習者」へと位置づけを変えることができます。位置づけが変われば、「では、この困っている学習者のために、自分はいったい何ができるだろう」という教師としての具体的支援策の検討へと入ることも可能になります。「自分にとって困った学習者は、自分からの支援を必要としている学習者なんだ」と思えば、カチンとくることもぐっと少なくなり、教室内外での様々な出来事にも、これまで以上に冷静に対処することが可能になります。やってみる価値は大いにあると思います。(横溝 2011b: 55)

著名な教育学者である東井義雄氏には名言が多いのですが、ここでは「川は岸のために流れているのではない」を紹介します。

川は 岸のために 流れているのではない。 川のために 岸ができているのである。 わかりきったことである。 それなのに 教師の考え 学校の方針に合わない子どもを「悪い子」「問題の子」「困った子」として 切り捨ててしまう風潮が横行しているのは どういうことか。

子どものために 「教師」があるのである。 子どものために 「学校」があるのである。

「できない子」のための岸になろう。「困った子」の岸になろう。そして、ともどもに「真理」「真実」の海をめざそう。そういう教師になろう。そういう学校を創ろう。

川は 岸のために 流れているのではないのだから。

教師としてできること／すべきこと／やってはいけないことが、強く熱いメッセージとして語られている名言です。

高橋 (2021:212-218) は、70 の「心に刻んだ名言」を紹介しています。その中から、私の心に響いた名言を、以下に抜粋します。

- ・「授業を通じてどんな生徒を育成したいのか」自らに問い続けること。
- ・「いっぱい教えた」は教師の自己満足。
- ・生徒にとって「楽しい授業」の前提は、教師自身が「授業を楽しむ」こと。
- ・学習も指導も「遊び半分」はダメ。でも「遊び心」は大切。創造性と独創性こそ教師の生命。
- ・生徒一人ひとりと「眼」をつなぎ「心」をつなごう。授業そのものが「コミュニケーション」。
- ・生徒は必然性・必要性を感じたとき、意見があるとき、読もう・聞こう・書こう・話そうとする。
- ・悩み多きは正常の証し。すべての責任を生徒に転嫁して平気になったら教壇を降りるとき。
- ・わずかばかりの知識を切り売りしていると3年たてば教師は枯れる。生徒とともに成長し続ける教師であれ。
- ・プロの教師としての成長 (professional teacher development) は、慣れ親しんだ教え方から脱却し、新たな自分の型を創出すること。教師道は「守破離」の道。
- ・教師が守るべきものは「生徒の自尊心」 (self-esteem)。教師自身のプライドにあらず。
- ・生徒の「関心」を呼び起こす学習内容と「意欲」を持って取り組める活動を与え、そこからの学びを普段の生活に生かそうとする「態度」を育てよう！
- ・生徒 (人間) は、教わっていないこと、訓練していないことはできない。生徒

の学力は授業を写す鏡。

- ・たとえ謙遜のつもりでも「お見せできるような授業ではありませんが…」はプロとして禁句。
- ・「うちの生徒には無理」と教師が思ったその瞬間に、生徒たちの持つ可能性の芽は枯れる。

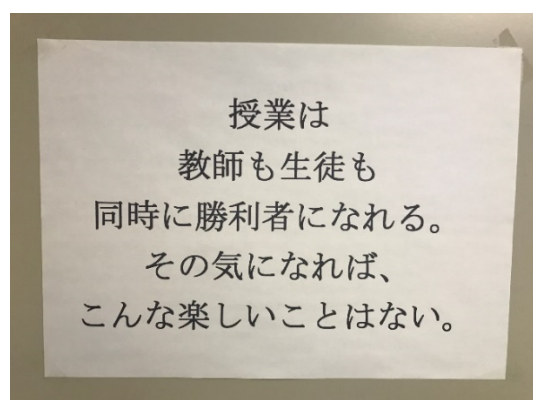
高橋一幸氏は、これらの名言を「教師としての『師魂』錬成のため」と位置づけています。声に出して読んでみることで、教師の役割の再確認ができます。

ここで少し話が横にそれますが、私はNHKの大河ドラマが大好きです。もう何十年も毎週欠かさずに視聴し続けているのですが、平成21年は『青天を衝け』で、「日本資本主義の父」と称される渋沢栄一が主人公でした。以下は、栄一の母親役の和久井映見さんのセリフです。

あんたがうれしいだけじゃなくて、みいんながうれしいのが一番なんだで。

この場面で私は「そう、そう、そうだよね...。」と強く感情移入して、号泣してしまいました。私の研究室のロッカーに貼っている名言と、見事につながっていたからです。

図3 研究室に貼ってある名言



この名言は、私が敬愛する田尻悟郎先生からいただいたメッセージをまとめたものです。田尻先生はある部活の顧問をなさっていて、何かの大会の決勝戦で惜しくも負けた直後に、以下のようなメールを私に送っていただきました。

横溝先生、勝負事は残酷です。勝者がいるということは、敗者もいるということ。歓喜の勝者がいる一方で、悔しくて泣いている敗者もいるのです。今日の私たちも、そうでした。でも、授業は違います。生徒と教師が一緒になってがんばって、生徒ができないことができるようになる、そのことを、生徒と教師がイエイ！と共に喜び合える。授業はそんな場なんです。このことに気づいて、そういう授業をめざせば、こんな楽しいことはありませんよね！

このメッセージをいただいて以降、初めて教壇実習に向かう日本語教育実習生に、私はこんな言葉をかけるようになりました。

これから皆さんが授業をする日本語学習者は、みなさんの「敵」ではありませんよ。「敵」ではなくて、何だと思えます？「敵」ではなくて、一緒に授業を創っていく「仲間」だと思ってください。(横溝 2021: 78)

「学習者＝一緒に授業を創っていく仲間」という考えは、私自身がいつまでも持ち続けていたいと思っていることです。

上掲の田尻悟郎先生と、2022年3月25日にオンラインでお話しする機会がありました。その中で、「楽しい授業」よりも「うれしい授業」の方が大切だとおっしゃっていました。二つの授業の違いをまとめると、以下のようになります。

「楽しい授業」

- ・教師が面白かったり興味深かったりする教材や指導方法を示すことで、学習者が「楽しさ」を感じる授業である。
- ・「楽しい」は、外からの要因によってもたらされることが多い感覚である。
- ・「楽しい授業」は、学習者がやや受動的であっても成立する。

「うれしい授業」

- ・学習者が「わかる」「できる」などによって自ら喜びを身体から感じる授業である。
- ・「うれしい」とは内面的・内因的な感覚である。「わかる」ことも「できる」こ

とも自分の心身で達成するしかない。自分以外の誰も何も、自分が「わかる」ことや「できる」ことを成立させることはできない。

- ・「うれしい授業」は、学習者が能動的に取り組まなければ成立しない授業である。

以下、田尻先生のご発言を、抜粋引用します。

「面白い」とか「興味がある」とか「楽しい」というのは、教師がもたらしてやる部分だと思うんですね。「面白いやろ」「英語楽しいやろ」「奥が深いやろ」と伝えるのが教員の仕事で、できるようになるまで歯を食いしばって努力し続けるのが学習者の仕事。そこで、やっとできて「できた！」という喜びとか、連続してできるようになって「自信がついた！」とか、最後は「おれ、それ得意です！」と言えるようになっていく。これは、努力なくして、できるわけないから、「それが君たちの仕事だよ」と、学習者には伝えます。

だから、好きにさせる教員と歯を食いしばってできるようになる学習者という二つの存在があるんです。その歯を食いしばっている時に、教員は好きにさせるだけじゃなくて、近くに行って励ましてやって、できないことがあれば、「じゃあ、こうしてみようか、ああしてみようか」という提案をしてかないといけないし、工夫をしないとイケないんです。それをやっている教員しか伸びません。黒板のところずっと説明し続けている教員は伸びることはありません。学習者の苦悩に付き合わないから。

努力していてできない時に、こちらも必死になって教えます。それでやっとできるようになった時に、生徒が「やった！できた！」という横で、先生も「よっしゃ！」とガッツポーズしているのが授業やで、という話をします。この話には、学習者も先生方も納得するんですね。

その意味で、「うれしい授業」というのは、教員にとっても学習者にとってもうれしいと思います。それは、「何かができるようになる、分かるようになる」ということですから。

「名言」というにはかなり長めの引用になりましたが、「学習者のために教師がすべ

きこと・できること・やっちはいけないこと」の内容がギュ〜と凝縮されたご発言だと、私は強く思います。

4. おわりに

以上、成長することにちょっと疲れた時にできる方策をいくつか提案しました。方策は決してこれだけではありませんし、ある意味無限にあると考えられます。また、ご提案した方策のどれが有効かは、先生によって異なるはずです。教師の成長は、まさに人それぞれだからです。

教師が変容していく道筋は、一様なものではなく、多くの出来事や体験により多様性を帯びた過程なのである。(横溝 2010: 170)

「1. はじめに」で述べたとおり、現在の私は「成長し続けることは教師にとって重要ですよ、たとえその成長が少しずつであっても。」と考えています。本稿は、その「少しずつ」を継続するためのアイデアの提示を試みるものでした。「少しずつ」を継続するためには、最初の一步を踏み出さなければなりません。本稿の最後に、ある女性のエピソードを紹介します(加藤 1999: 27-28)。

アメリカでニューヨークからマイアミまで歩いたお婆さんがいた。気の遠くなるような長い徒歩旅行である。そのお婆さんは、新聞記者のインタビューに「はじめの一步を踏み出すのには勇氣はいらない」と答えたという。二歩目は、第一歩を踏み出してから考えればよい。

参考文献

- 伊東祐郎・松本茂(2005)「日本語教師の実践的知識・能力」縫部義憲(監修)・水町伊佐男(編)『講座・日本語教師学第4巻:言語学習の支援』2-24 スリーエーネットワーク
- 加藤諦三(1999)『行動してみることで人生は開ける』PHP文庫
- 高橋一幸(2021)『改訂版・授業づくりと改善の視点—小と高とをつなぐ新時代の中学校英語教育』教育出版
- 瀧沢広人・大塚謙二・胡子美由紀・畑中豊(2020)『4達人に学ぶ!究極の英語授業

- づくり&活動アイデア』明治図書
- 田尻悟郎 (2012) 「相手の力を引き出す指導の極意と心がまえ」『日本語教育ジャーナル』秋号 24-26、アルク
- 東井義雄 (1989) 『東井義雄詩集』探究社
- 中嶋洋一・坂上渉・高橋友紀・中山浩太郎・宮崎貴弘 (2021) 「コロナ禍で見直す教師の役割・教室の役割」『英語教育』1月号 10-13 大修館書店
- 中谷彰浩 (2005) 『なぜあの人は「困った人」とつきあえるのかーカチンとくる前にしておく 48 のこと』PHP 文庫
- 春原憲一郎・横溝紳一郎 (編著) (2006) 日本語教師の成長と自己研修—新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして』凡人社
- 横溝紳一郎 (2000) 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』日本語教育学会 (編) 凡人社
- 横溝紳一郎 (2009a) 「アクション・リサーチは楽しい研究か」『2009 年日本語教育学会春季大会』配布資料
- 横溝紳一郎 (2009b) 「学び続ける日本語教師になろう！」『月刊日本語』12月号 12 アルク
- 横溝紳一郎 (2010) 「教師研究—教師の成長を支援する研修デザイン」西原鈴子 (編) 『言語の可能性 第8巻：言語と社会・教育』169-192 朝倉書店
- 横溝紳一郎 (2011a) 「地域で創り上げる小学校英語教育」柳瀬陽介・組田幸一郎・奥住桂編『成長する英語教師をめざして—新人教師・学生時代に読んでおきたい教師の語り』29-35 ひつじ書房
- 横溝紳一郎 (2011b) 『クラスルーム運営 (日本語教師のための TIPS77 第1巻)』くろしお出版
- 横溝紳一郎 (2021) 『日本語教師教育学』くろしお出版
- 横溝紳一郎 (編著)・大津由紀雄・柳瀬陽介 (著) 田尻悟郎 (監修) (2010) 『生徒の心に火をつける—英語教師田尻悟郎の挑戦—』教育出版
- 横溝紳一郎・山田智久 (2019) 『日本語教師のためのアクティブ・ラーニング』くろしお出版
- 吉田達弘・玉井健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介編 (2009) 『リフレクティブな英語教育をめざして—教師の語りが拓く授業研究』ひつじ書房